

宇治拾遺物語のオノマトペ

—軍記物語との比較から—

中 里 理 子

1 研究の目的

オノマトペ¹の研究は形態面、音韻面、意味面など諸分野に及び盛んであるが、時代ごとのオノマトペの実態について十分に明らかにされているとは言い難い。中古のオノマトペについては山口仲美1986・1998により詳細に研究されているが、中世以降ははまだ研究の余地がある。筆者は中世の文学作品におけるオノマトペの出現状況を明らかにするために、これまで『平家物語』『太平記』をはじめとする中世軍記物語のオノマトペを調査し、特徴を整理してきた²。次には、口承文学であり、軍記物語と同様に口語的特徴の現れやすい説話集を調査し、中世のオノマトペ使用の実態を明らかにしたいと考えている。

本稿で取り上げる『宇治拾遺物語』は、廣田収2003に整理されている³ように、『今昔物語集』『古事談』『古本説話集』『十訓抄』『打聞集』など他の多くの作品と共通する話が収められており、文体や表現の研究も他作品との比較の中で行われたものが多い。オノマトペについても、市村和子1968、平田歩2001など、『今昔物語集』と比較しながら『宇治拾遺物語』

1 擬音語・擬態語の総称として「オノマトペ」を用いる。

2 拙稿2012、2014のほか、2015a「義経記の擬音語・擬態語—「太平記」との比較を中心に—」『白百合女子大学研究紀要』50号、2015b「『曾我物語』の擬音語・擬態語—諸本の比較から—」『白百合女子大学研究紀要』51号による。

3 『『宇治拾遺物語』表現の研究』pp.37-38。

の特徴を見る研究がある。市村1968によると、『宇治拾遺物語』は「『今昔物語集』よりも擬音（容）語⁴の語彙が豊かで」あり、「使用度において『今昔物語集』の三倍強で、それだけ多くの擬音（容）語が用いられているといえる」という。本稿では、多くの用例が得られる『宇治拾遺物語』を対象にオノマトペを調査し、軍記物語のオノマトペとの違いを明らかにしたい。他の説話作品との関わりから『宇治拾遺物語』の表現の特殊性を見出すことを目的にするものではなく、説話物語と軍記物語のオノマトペを比較し、ジャンルによるオノマトペの出現の違いや中世の作品に見られるオノマトペの実態をまとめることを目的としている。

『新潮日本古典集成』の解説⁵によると、『宇治拾遺物語』は「特別な異本」はなく、大きく「古本と流布本」の二つの系統があるという。本稿では、「古本」に属する陽明文庫蔵本を底本とする新日本古典文学大系本⁶を用いる。

2 先行研究に見る特徴

『宇治拾遺物語』のオノマトペに言及した論文は、先に挙げた市村和子1968、平田歩2001のほか、説話グループとオノマトペの分布との関係等を見る福田益和1975、伊東玉美1987などがある。これらの先行研究では、和文体を特徴とする『宇治拾遺物語』の文体との関わり、口語（俗語）の要素の指摘、説話の内容との関わりについても指摘されているが、本稿ではオノマトペ自体の特徴に焦点を当てて考察を進める。まず、先行研究で指摘されている『宇治拾遺物語』のオノマトペの語彙的特徴について整理しておく⁷。

4 市村1968では、擬音語・擬容語という名称を用い、総称には「擬音（容）語」を用いている。

5 新潮日本古典集成『宇治拾遺物語』の解説（大島健彦）pp.547-548。

6 1990年岩波書店刊。なお、参考までに流布本である宮内庁書陵部蔵無刊記古活字本を底本とする日本古典文学全集本（小学館）についても調査したが、得られた用例は、和語については新日本古典文学大系本とほぼ同じであった。

7 文体や内容との関わりについては扱わない。

市川1968では、以下の四点が指摘されている。

- ① 語基が共通する語が多い。(例：キラト、キラキラトなど。)理由として、表現上の変化を求めたこと、使い分けによってより具体的写実的描写をしていること、語彙の乏しさによること、の三点がある。
- ② 中古の物語に見られるフト⁸が見られる。
- ③ 「ABリ」型の反復形「ABリABリ」がない。
- ④ 語音結合ではuを含む音が多い。またi-eの結合例はない。

①～④に簡単にまとめたが、語形や語音など広く特徴が指摘されている。一方、平田2001では、使用頻度の高い「キト」、畳語形と関わりのある「キラキラト」「キラト」、泣く様子を表す「サメザメト」「ハラハラト」等を取り上げ、『今昔物語』と比較しながら意味や効果の違いをまとめている。

以上の指摘を参考にして、本稿でも具体的な語を取り上げ、形態面と意味面から考察していく。

3 宇治拾遺物語のオノマトペ

『宇治拾遺物語』に見られたオノマトペを稿末資料⁹に示した。本稿では副詞を対象とし、「きらきらし」のような形容詞は扱わない。

抽出したオノマトペは異なり語数65語、延べ語数で129例あった。市村1968では61語121例、福田1975では67語114例としており、用例数が多少異なっているが、これは、抽出した本¹⁰とオノマトペの判定のしかたによるものと思われる。本稿では、「ほそづゝ」「ほうけゝ」など動詞や形容詞の畳語形、「えい声」など複合語になっているもの、「ふつとえ入らず」の

8 市村1968によると、「フト」「ツト」等はずいぶん中古の物語にしばしば見られるという。

9 稿末資料と同様に、本文でオノマトペを引用する際には、1拍・2拍の語は「と」を伴い、3拍以上の語は助詞を伴わずに表示する。

10 市村1968、福田1975は日本古典文学大系本（底本は寛永年間印行と目される無刊記古活字印本）に拠っている。

ように打消し表現とともに用いられ一般語彙化しているもの、「つらつら」のように疊語形ではあるがオノマトペではなく一般語彙とみなされるものは取らなかった。また、新日本古典文学大系本等の注記を参考に、「たゝへ」と（走りて）」は「ただただと、ひたすらに」、「あつへ」と強げにす」は「厚ゝ」と判断し、取らなかった。他に、「うと言ふ」等、うめき声とされる語はオノマトペと判断した¹¹。「おうへ」と「をうへ」は表記の異なる同一語として数え、「きときと」は「きと」を重複させたものとして数え¹²、「なへなへくたくたと」は「なへなへ」と「くたくた」に分けた。

音声を表す擬音語と様子を表す擬態語に分けて見ると、擬音語が異なり語数35語で48例、擬態語が異なり語数33語で81例となった。異なり語数の総計が先の数と異なるのは、「こそこそ」「さらさら」「ひしひし」の三語に擬音語の例と擬態語の例が見られたためである。

使用頻度が高い語を見ると、4例以上あった語は次の7語である。

きと15例 ふと9例 はらはら7例 きらきら5例
さめざめ4例 さらさら4例 ほろほろ4例

先行研究でも指摘されているように、「きと」「ふと」が非常に多い。また、市川1968が指摘した「語基が共通する語」については、「うと」「うゝへ」、「をうと」「おうへゝ・をうへゝ」、「こそろ」「こそへゝ」、「さくと」「さくへゝ」、「そと」「そゝと」、「ぶぶり」「ぶぶへゝ」、「はたと」「はたへゝ」、「ふたと」「ふたり」「ふたへゝ」の8組であった。10組を挙

11 「はと笑ふ」などの笑い声と同じように擬音語と判断した。「うと」「うゝへ」「をうと」「おうへゝ・をうへゝ」「やと」「ゑうへゝ」など種類が多いため、異なり語数が多くなったと考えられる。

12 「きときとと」ではないため、「きと」の重複と判断した。「そとそと」なども同様である。「よよと」と「(さくりも)よよに」は助詞の違いもあり、「さくりもよよに」が定型表現となっているため、別語とした。「つふつふ」「つぶつぶ」は新日本古典文学大系本の表記に従い、意味が異なる語として別語に数えた。

げた市村1968¹³よりは少ないが、異なり語数62語のうち約4分の1が相互に関わりのある語となっており、高い割合であると言えるだろう。

また、今回は取り上げないが、『宇治拾遺物語』にはオノマトベを語基に持つ「-めく・めかす」型の動詞が多い。小峯和明1999には『宇治拾遺物語』に「ひしめく」の語が多いことが指摘されている¹⁴。「ひしめく」以外にも「-めく・めかす」動詞には多くの種類が見られ、「いらめく・いりめく・うめく・おめく・くつめく・くるめく・くるめかす・さゝめく・ざゝめく・さらめかす・そゝめく・そよめく・とどめく・とどろめく・のゝめく・ひしめく・ひらめく・ぶめく・ふためく・ふためかす・をめく」がある。他の説話集との比較のために、「-めく・めかす」型動詞が多いことを指摘しておく。

4 軍記物語との比較

筆者が調査した軍記物語のオノマトベ¹⁵と比較しながら、1) 擬音語の割合、2) 使用頻度の高い語、3) 軍記物語に多用されているが『宇治拾遺物語』ではほとんど見られない語、の三点から『宇治拾遺物語』のオノマトベの特色を見ていきたい。

4.1 擬音語の割合

『宇治拾遺物語』では、擬音語の異なり語数35語に対して擬態語は33語で、異なり語では擬音語のほうが多い。延べ語数は、全129例中擬音語48例（約37.2%）である。

同様に『平家物語』について擬音語の割合を見てみよう。覚一本では、異なり語数は擬音語19語に対して擬態語35語、延べ語数は全236例中擬音

13 抽出した本の違いによると思われる。また、日本古典文学全集本では「ふたり」など他の語形も見られる。

14 『宇治拾遺物語の表現時空』「ひしめくもの」(pp.34-57)による。

15 拙稿2012、2014のデータと比較する。

語89例（約37.7%）である。延慶本は、異なり語数は擬音語24語に対して擬態語42語、延べ語数は全153例中擬音語81例（約52.9%）である。比較すると、『宇治拾遺物語』の擬音語は、異なり語数では『平家物語』よりも割合が非常に高いことがわかる。ただし、延べ語数では『平家物語』の方が多し。軍記物語では合戦場面で同じ擬音語を繰り返し用いているのに対して、『宇治拾遺物語』ではさまざまな場面の音声を工夫して用いていると言える。

次の例1は、水に関する音を状況に応じて表し分けている例である。（下線は筆者。括弧の中は新日本古典文学大系本に記された通し番号である。以下同じ。）

例1 此聖、たうさきにて、西に向ひて、川にぎぶりと入程に、舟ばたなる桶に足をかけて、づぶりとも入らで、ひしめく程に、弟子の聖はづしたれば、さかさまに入て、ごぶーへとするを、（一三三）

水音は、軍記物語にも「ぎ(ん)ぶと（覚一本）」、「ツブト（延慶本）」などが見られるが、例1では「ぎぶり」「づぶり」「ごぶーへ」と使い分けることで、状況を生き生きと描写している。軍記物語では「よっぴいてひやうど射る」「関をどつと作る」「むずと組んでどうど落つ」など定型的表現が見られるのに対して、『宇治拾遺物語』ではその時々々の音声を表現し、臨場感を持たせていると言える。

音声の内容の違いを見ると、『平家物語』では、弓矢や刀の音、軍勢や兵の動きを表す大きな音が多く見られたのに対し、『宇治拾遺物語』では次の例2～4のような身近な音、小さな音が多く見られた。

例2 わかやかにきたなげなき女どもの、白くあたらしき桶に水を入れて、
此釜どもにさくーといる。 (一九)

例3 谷の底の方より、物のそよーと来る心地のすれば、何にかあら
んと思て、やをら見ればえもいはず大きな蛇なりけり。 (八七)

例4 桶をさげて、みなかき入さはぐ程に、三尺斗なる鯰、ふたーと
して庭にはひ出たり。 (一六八)

『宇治拾遺物語』にも軍記物語に用いられているオノマトベが見られたが、それらは、「弓を強く引て、ひやうど射たりければ (一〇四)」「舟の櫂して頭をはたとうち (一二三)」のように弓で射たり叩いたりするときの物音や、「聖の坊のかたはらに、どうと落つ (一〇一)」のような大きい音である。軍記物語にはほとんど見られず『宇治拾遺物語』に見られるのは、例1～3のような身近な物音、小さな音を表すオノマトベである。

4.2 使用頻度の高い語

ここでは、「きと」、「ふと」、「はらはら」「さめざめ」等の泣く表現と笑う表現、「きらきら」について比較する。

○「きと」

『宇治拾遺物語』では、瞬時の素早い動きを表す例と、命令形等とともに使われ確実な動きを表す例がある。共起する動詞を見ると以下のようになる。(数字は2例以上の場合の用例数。)

- ①「見る」動作：見る・見入る・見やる・見上ぐ²・見奉る・御覧ず
- ②視覚以外の知覚：耳を立つる・うけ給わる・思ふ
- ③出処進退：立離る
- ④命令・意志行為等：す・申す²¹⁶・参れ (命令形)

16 「きとーよく申たるぞ (三七)」を、「きと」2例と数えた。

軍記物語にも「きと」（「きつと」）は多数見られた。「きと」「きつと」の両形について見てみると、『平家物語』覚一本は「き(ツ)と」¹⁷ 13例、『平家物語』延慶本は「キト」13例、「キツト／屹ト」2例、『太平記』は「きと」4例、「きつと／屹と」27例であった。軍記物語において多用されている語であると言える。

『宇治拾遺物語』の例と同様に共起する動詞の数を分類すると、以下のようになる。軍記物語では否定形等の文末モダリティとの呼応例も見られたため、④に入れた。

	①	②	③	④	計
『宇治拾遺』	7	3	1	4	15
『平家』覚一本	4	1	1	7	13
『平家』延慶本	5	1	3	6	15
『太平記』	27	4	0	0	31

オノマトペ全体数から見ると、『宇治拾遺物語』は軍記物語より「きと」の用例数が多い。共起する動詞については、『宇治拾遺物語』でも「見る」動作が多く、軍記物語と同じような傾向にある。命令形について、用例の多い覚一本を見ると、「参れ2・立ち寄り給へ2・具し奉れ・とつて参れ・見て参れ」のように「行く・来る」という動作に用いられている。『宇治拾遺物語』でも「参れ」と共起しており、軍記物語と同様の用いられ方であることがわかる。「きと」は、確実な動きや瞬時の動きを表していたと見られる。

○ふと

『宇治拾遺物語』では、「ふと」が9例見られ、共起する動詞は次にあげるように9例中7例が出処進退を表す語であった。

出处進退：走り出づ・来・逃ぐ・出づ・入り来・向かふ・寄る

17 用例を抽出した日本古典文学大系本の表記に従う。

その他：見ゆ・驚く

「ふと」で表される状況・動作は、次の例5・6に見るように、滑らかで素早い動き、突然起こる様子である。

例5 「何事にか侍らん」とていざりよりたるを、何の障りもなければ、
ふと入り来てひかへつ。 (一〇八)

例6 かい伏して逃るを、追付てくれれば、「頭うち割られぬ」とおぼゆれば、俄にかたはらざまに、ふと寄りたれば、 (一三二)

軍記物語の「ふと」の用例数を以下に挙げる。参考までに、「ふつと」の用例数も挙げておく。(共起する動詞はわかりやすく語を加えたり語形を変えたりしている。)

- ・『平家物語』 覚一本：ふと0 ふつと2〈切り落とす・ひっきる〉
- ・『平家物語』 延慶本：フト0 フット1〈甲の緒を引きちぎる〉
- ・『太平記』：ふと5〈射通す・懸け抜く2・来る・門を出づ〉
ふつと6〈懸け抜く・懸け入る・吹き懸ける・手縄の勾を切る・胴を射抜かる・木の柄をねじ切る〉

「ふと」は覚一本と延慶本には1例も見られず、「ふつと」は物を切るオノマトペとして用いられている。『太平記』では「ふと」に出処進退の動作が3語4例、「ふつと」に出処進退の動作が2語ある。軍記物語では「ふつと」は主に物を切るオノマトペに用いられており、『宇治拾遺物語』では「ふつ〜」がそれに当たっている。「ふと」に関しては、軍記物語では『平家物語』に見られず『太平記』にのみ見られたことが大きな特色であり、用例数の割合から考えて『宇治拾遺物語』に特徴的なオノマトペであると

言えるだろう。佐々木2012の日本古典文学大系のデータベース（国文学研究資料館による）の調査によると、「ふと」の出現状況は中古188例、中世36例、近世41例であるという。中古と中世の意味を比べると、動作を表すものは中古54%、中世58%で違いはないが、知覚を表すものは中古17%、中世3%であり、違いが見られるという。『宇治拾遺物語』でも、9例中2例は動作以外の語と共起しており、中古の特徴が見られるが、『太平記』では動作以外の語と共起しておらず、『宇治拾遺物語』との相違が見られる。

○泣く表現・笑う表現

まず泣く表現に関してだが、『宇治拾遺物語』では「さめべ〜」3例、「はら〜」4例¹⁸、「ほろ〜」4例、「よゝと・[さくりも]よゝに」2例であった。『平家物語』覚一本は「さめざめ」12例、「はらはら」32例、延慶本は「サメザメ」21例、「ハラハラ」17例、「サト」4例、『太平記』は「さめざめ／小雨小雨」4例、「はらはら」17例であった。用例数としては『宇治拾遺物語』よりは『平家物語』に多く見られるオノマトペである。大きな違いは「ほろ〜」と「よよと」・「さくりもよよに」というオノマトペである。これらの語は、中里2004の調査によると中古に見られるオノマトペであるが、軍記物語にはほとんど見られなかった。

次に笑う表現について見ると、『宇治拾遺物語』は「えい〜」1例、「きやう〜」1例、「くつ〜」1例、「はと」2例、「はつと」2例が見られた。『平家物語』は覚一本には「からから」1例、「ど(ツ)と」6例、「は(ツ)と」2例、延慶本¹⁹には、「ドット」1例、「ハト」8例が見られ、『太平記』は「からから」15例、「どうと」6例、「どっと」4例、「にこと／莞爾と」2例、「莞爾〈につこ〉と」1例が見られた。軍記物語では軍勢など集団の笑いが多く見られるが、『宇治拾遺物語』は個人の笑いが中心であり、「えい〜」「き

18 項末資料に見るように、「はらはら」7例のうち3例は泣く行為以外を表している。

19 延慶本では「咲フ」と表記されている。

やうーへ」など臨場感に富み、また、「くつーへ」とのどを鳴らす音など、細かい描写が見られる。また『太平記』に「にこと」「につこと」という表情としての笑いが見られるが、『宇治拾遺物語』には見られない。

○きらきら

『宇治拾遺物語』には5例見られ、使用頻度が高い語である。光る様子や火が燃える様子に用いられているが、美しく輝く様子を表すだけでなく、例7のようにマイナスイメージも見られる。

例7 日のさしたるに、頭きらーへとして、いみじう見苦し。(一六二)

軍記物語の場合は、『平家物語』覚一本0例、延慶本0例、『太平記』0例である。『義経記』に1例²⁰見られたが、『曾我物語』も0例であり、軍記物語にはほとんど用いられないオノマトペである。中世の軍記物語と比較すると、『宇治拾遺物語』の「きらきら」5例は特徴的であると言える。

4.3 軍記物語に多用されている語

前項で『平家物語』に「ふと」が1例も見られないことを指摘したが、『平家物語』では滑らかで素早い動きを「つと」「つつと」で表している。同じく素早い動きを表す「さと（さつと）」も加えて『宇治拾遺物語』と軍記物語とを比べると以下ようになる。

- 『宇治拾遺物語』：さと1 さつと0 つと1
- 『平家物語』覚一本：さ(ツ)と4 つと4 つ(ツ)と19
- 『平家物語』延慶本：サト3 サツト1 ツト29
- 『太平記』：さと8 さつと14 つと9

『太平記』の用例数はやや少ないが、軍記物語では素早く滑らかな動き

20 兜の星が光る様子を表している。

を「ふと」ではなく「つと」で表したのであろう。また、「さと」「さつと」も軍記物語に多く見られるオノマトペである。

市村1968によるとフト・ツトは中古の物語に見られる語であるという。山口仲美1998に中古の物語の「つと」の用法²¹が考察されているが、『宇治拾遺物語』では「ふと」が多用され「つと」は1例しかない。山口1998によると、平安文学作品の「つと」68例中、「動かないで、ある状態をずっと続ける様を表わす」意味が20例、「勢いよくすばやいさまを表わす」意味が5例、「隙間なく密着したさまを表わす」意味が43例であるという。『宇治拾遺物語』の「つと」は、次の例8に見るように、「隙間なく密着したさま」に使われている。

例8 晴明、少将をつと^{~~~~}いだきて、身かためをし、 (二六)

『宇治拾遺物語』の「つと」は、中古の作品に多い用法と同じ用いられ方をしており、すばやいさまは「ふと」や、先に見た「きと」で表していたと見られる²²。次の例9「ツト」は軍記物語の用例だが、先の『宇治拾遺物語』の用例5「ふと」と同じような用いられ方であるが、軍記物語のほうが勢いがある動きを表しているようである。

例9 残二人シコロヲカタブケテ、ツト^{~~~~}寄ケルヲ、左右ノ脇ニカヒハサミテ、(延慶本)

もう一点、軍記物語に見られるものの『宇治拾遺物語』に見られないオ

21 『平安朝の言葉と文体』第十一章「『つと』抱く」考 (pp.215-218) による。

22 『宇治拾遺物語』には「ちうと立めぐりて」という表現があり、新日本古典文学大系の脚注に「つと後に立ちまわって」とある。「つと」に近いオノマトペがどうか、他の説話集の例などとあわせて考察したい。

ノマトベに漢語系オノマトベ²³がある。漢語系オノマトベとは、「蒼海漫々として」「涼風颯々と」等、漢語由来のオノマトベである。ここでは、金田一1978による分類のうち、「漢字二字のもの」の一部²⁴を対象とする。

調査した『宇治拾遺物語』古本と参照した流布本（日本古典文学全集本）に、漢語系オノマトベは1例も見られなかった。軍記物語には多く見られ、『平家物語』覚一本には異なり語数20語、延べ31例、延慶本には異なり語数71語、延べ134例、『太平記』には異なり語数61語、延べ104例が見られた。軍記物語は和漢混交文として漢語の要素が大きいが、『宇治拾遺物語』は市村1968の指摘する「和文的性格」「中古のかな文学に近いもの」であることによるものであろう。

なお、漢語系オノマトベに近い「-然」の語が1例見られた。

例10 困碁打有様を見れば、一人は立り、一人は居りと見に、忽然として失ぬ。 (一三七)

「-然」型は金田一1978に挙げられている二語の漢語の型の一つであり、漢語でオノマトベに近い働きを持つ語である。中古の物語に多い「ふと」が見られた『太平記』に、「忽然」は8例（異なり語数5語）が見られ、「-然」の語は全部で14語45例あった。和文的性格が強い『宇治拾遺物語』に「-然」型の漢語系オノマトベが1例あることは、特徴の一つであろう。

23 筆者は和語のオノマトベを和語系オノマトベ、漢語由来のものを漢語系オノマトベと称して軍記物語のオノマトベ研究を行った。本来は現代語において和語のオノマトベに近い働きを持つもの（「ごうごうと」等）に対して「漢語系オノマトベ」とするべきだが、便宜的に漢語系オノマトベと称する。

24 ここではより和語に近い「同じ語根を重ねたもの」「同じ子音の拍を重ねたもの」「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」を取り上げる。

5 まとめ

本稿で見てきた『宇治拾遺物語』の特徴をまとめると次のようになる。

- (1) 軍記物語に比べて音声を表す擬音語の異なり語数が多い。延べ語数は軍記物語のほうが多いことから、『宇治拾遺物語』は定型的な表現によってではなく、状況に応じてオノマトペを使い分けていると言える。また、大きな音を表した軍記物語と比べて、身近な音や小さな音が多い。
- (2) 使用頻度の高い「きと」は、軍記物語と同様の用いられ方をしているが、「ふと」は軍記物語には見られず、『宇治拾遺物語』に多用されており、中古の物語の特徴と重なる。
- (3) 泣く表現は、軍記物語に見られなかった「ほろほろ」「よよと／〔さくりも〕よよに」が用いられていたが、これらは中古の物語に見られたオノマトペである。
- (4) 笑う表現は、軍記物語が集団の笑いが多いのに対し、個人の笑いが多い。笑い声の種類が多く、小さな笑い声まで工夫されているが、擬態語は見られない。
- (5) 軍記物語にはほとんど見られない「きらきら」が多用されている。
- (6) 軍記物語に多い「つと」は、『宇治拾遺物語』には1例しかない。
- (7) 軍記物語に多く見られる漢語系オノマトペが見られない。ただし「-然」型の語が1例ある。

以上見てきたように、説話集である『宇治拾遺物語』に見られるオノマトペと軍記物語に見られるオノマトペは、種類も用いられ方も異なっている。『宇治拾遺物語』のオノマトペは、先行研究に指摘されているように中古の特徴と重なる面が多かった。他の説話集と比べることで、さらに別の特徴も出てくるだろう。中世のオノマトペの全体像を明らかにするためには、説話、軍記、随筆、御伽草子など、広く様々なジャンルを見る必

要がある。様々なジャンルのオノマトペを総合して中世のオノマトペを明らかにし、それらのオノマトペが近世に受け継がれていった様相を明らかにしたいと考えている。

【引用・参考文献】

- 市村和子1968 「宇治拾遺物語の擬音語・擬容語」『国文』（お茶の水女子大学）29号
- 伊東玉美1987 「宇治拾遺物語（説話）の文法」『国文法講座5 時代と文法—近代語』明治書院
- 稲垣泰一1988 「『宇治拾遺物語』の表現」『説話』8号
- 金田一春彦1978 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編）角川書店
- 小島憲之2014 「説話を読み解く—宇治拾遺物語の戦略—」『成城国文学論集』（成城大学院文学研究科）36輯
- 小峯和明1999 『宇治拾遺物語の表現時空』若草書房
- 佐々木文彦2012 「副詞『ふと』の意味・用法の変遷について」『近代語研究』16集（武蔵野書院）
- 佐藤武義1987 「『宇治拾遺物語』の表現機構」『中世文学』32号
- 田中牧郎・山元啓史2014 「『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応—語の文体的価値の記述—」『日本語の研究』10巻1号
- 富田裕行1967 「説話集の文章—共通説話の語彙・語法を中心として」『文学論藻』（東洋大学文学部紀要）36号
- 中里理子2004 「『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—」『上越教育大学研究紀要』24巻1号
- 中里理子2012 「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、覚一本、百二十句本の比較から—」『上越教育大学研究紀要』31巻
- 中里理子2014 「太平記の擬音語・擬態語—平家物語との比較を交えて—」『白百合女子大学研究紀要』第49号
- 平田 歩2001 「『今昔物語集』にみられる福祉型（ト型）象徴詞について—『宇治拾遺物語』との相違をみる—」『新樹』（梅光学院大学院文学研究科）15号
- 廣田 収2003 『『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院
- 福田益和1975 「古今著聞集の表現に関する一考察—今昔物語集・宇治拾遺物語との比較を通して—」『語文研究』（九州大学）39・40号
- 藤井俊博2001 「宇治拾遺物語の語彙と文体—古事談との比較を通して—」『同志社国文学』54号
- 山岡敬和2014 『説話文学の方法』新典社

山口佳紀1986 「今昔物語集の形成と文体—仮名書自立語の意味するもの—」『今昔物語集と宇治拾遺物語』（日本文学研究資料新集6）有精堂出版

山口仲美1986 『平安文学の文体の研究』明治書院

山口仲美1998 『平安朝の言葉と文体』風間書房

藁谷隆純2006 『『宇治拾遺物語』の語法』『日本語日本文学』（創価大学）16号

【稿末資料】『宇治拾遺物語』のオノマトペ

- *「きと」「さつと」のように1拍・2拍のオノマトペは他とまざれないように「と」を付した。
- *使用状況を示すために、共起した動詞を〈 〉に示した。
- *複数例見られた場合は、語のあとに数字で示した。
- *反復符号は「〜」で示す。

うと〈言ふ〉 う、〜 〈うめく〉 えい〜 〈笑ふ〉 をうと2〈言ふ〉 おう〜 〈おめく〉・をう〜 2〈言ふ・叫ぶ〉 きと13〈目見入る、す、見る、思ふ、耳を立つ、見やる、見上ぐ2、うけ給はる、見奉る、御覧ず、立離る、参れ（命令形）〉・きと〜 〈申したるぞ〉 きし〜 〈引く〉 きやう〜 〈笑ふ〉 きら〜 5〈す3・ある・火が出づ〉 きり〜 〈す〉 くた〜 4〈す・成る・なす2〉 くつ〜 〈喉を鳴らす〉 けし〜 〈起こす〉 こそ〜 3〈登る・す・手をする〉 こそろ〈渡る〉 ごぶ〜 〈す〉 さと〈血の涌き出づ〉 さくと〈臥す〉 さく〜 〈釜に水を入れる〉 さつと〈失せぬ〉 さは〜 〈なる〉 ざぶり〈川に入る〉 さめ〜 3〈泣く3〉 さや〜 〈鳴る〉 さら〜 と4〈かへらかす、算を出す、算を置く、算を押しこぼす〉 すは〜 〈打ちつく〉 する〜 〈生い立つ〉 そと〈のぞく〉・そと〜 〈撫づ〉 そ、と〈息を放つ〉 そよ〜 〈来〉 ちと2〈まどろむ、試む〉 ちうと〈立めぐる〉 つと〈いだく〉 つふ〜 〈読みきかす〉 つぶ〜 〈血が出て来〉 づぶ〜 〈切る〉 づぶり2〈投げ返す、川に入る〉 どうと〈落つ〉 とろ〜 〈矢を放つ〉 なへ〜 2〈なす2〉 はと2〈笑ふ2〉 はつと2〈笑ふ、とよみ笑ふ〉 はたと3〈経を打ち上ぐ、打つ、鳴る〉 はた〜 2〈戸をたたく、打つ〉 はら〜 7〈馬から降る、川に打ち入る、石を砕く、泣く、涙をこぼす、泣きまどふ、涙を落とす〉 ひし〜 3〈食ひに食ふ、す=男が詰め寄る、踏み鳴らす〉 ひやうど〈矢を射る〉 ふと9〈走り出づ、見ゆ、驚く、来、逃ぐ、出づ、入り来、向かふ、寄る〉 ふたと〈蹴る〉 ふた〜 2〈す2〉 ふたり〈打ち入る〉 ふつ〜 〈繩をおし切る〉 ふら〜 3〈いで来、飛ぶ2〉 ほうと〈蹴る〉 ほの〜 2〈明方になる、明く〉 ほろ〜 5〈うち泣く、泣く3、こぼれて落つ〉 みさ〜 〈成る=濡れる様〉 むず〜 〈折食ふ〉 ゆさ〜 〈揺るぐ〉 やと〈言ふ〉 ゆふ〜 〈す=沼地の様〉 ゆら〜 〈ゆく〉 よ、と〈泣く〉 [さくりも] よ、に〈泣く〉 ゑう〜 〈言ふ〉